

家庭—保育所—幼稚園

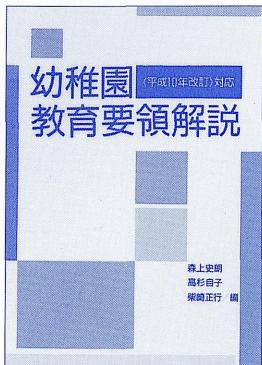
幼児の教育



平成10年改訂対応

幼稚園教育要領解説

付録 平成10年改訂・幼稚園教育要領全文



平成10年に改訂され、来年(12年)度より実施される 新『幼稚園教育要領』をより深く理解するための、教育要領解説書の決定版！

第一線の研究者・保育者が結集し、理論・実践の両面から、新教育要領を総合的に解説します。

最新刊

森上史朗 高杉自子 柴崎正行／編著

A5判・並製・カバー付・288頁・定価：本体1,600円+税

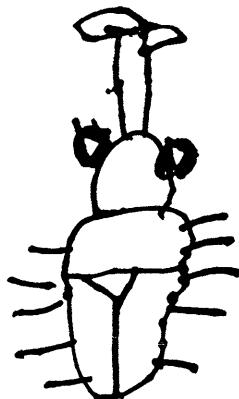
[主な内容]

- 第一章 幼稚園教育要領はどのように変わってきたか
—元年から10年までの子どもを取り巻く環境の変化と、改訂までの概略—
- 第二章 幼稚園教育の考え方の基本
—平成元年教育要領の基本を解説—
- 第三章 幼稚園教育の充実と発展(10年改訂のポイント)
—元年教育要領との相違点を詳しく解説し、新教育要領がめざすものを、くっきりと浮かび上がらせます—
- 第四章 幼稚園教育要領の内容
—教育要領の組立て、子どもの生活と遊び、各領域の意味と相互関係について、詳しく解説します—
- 第五章 幼稚園教育を計画し実践するために
—指導計画作成のための考え方の基本を詳説します—
- 第六章 教師の役割
—10年改訂で強調された“教師の役割”的ポイントについて詳説します—
- 第七章 幼稚園運営の弾力化
—これからの幼稚園運営の方向を明らかにします—

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第98巻 第8号



幼児の教育 目 次

第九十八卷 第八号

© 1999
日本幼稚園協会

全部自分のものにしたい心 津守 真 (4)

特集 『緑蔭図書紹介』

『とつときのとつかえっこ』

「幼児と高齢者の異世代交流の絵本を読む」 上垣内伸子 (8)

「障害者を障害者と思わない」 松原 洋子 (12)

『消費者教育のすすめ』 馬場 由子 (17)

『愛の妖精』と『銀の匙』 渡辺 純一 (21)

幼稚園の日々

たたずむ場、休む時 樋口早百合・無藤 隆 (26)



保育現場からの現代幼児論(3) 攻撃的感情を治める 友定 啓子 (28)

コミュニケーション能力を考える(3)

日本語の開国とコミュニケーション教育 村松 賢一 (36)

子育ての探究 その三 平安京の親子像 柴崎 正行 (44)

震災後の子どもたち(2) 震災から四年目のあれこれ 上崎 温子 (50)

生活者としての子どもたち 伊集院理子 (57)

表紙絵／北村 俊道

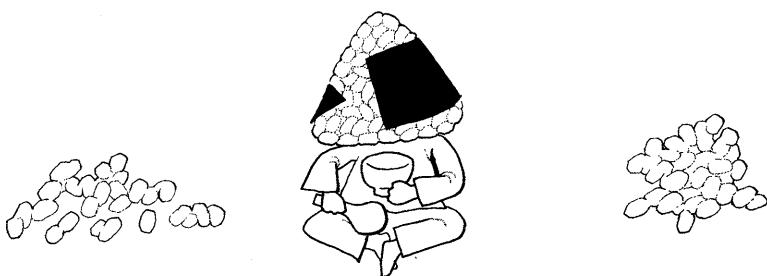
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「和食党」

編集委員／田代 和美・吉岡 晶子・田中三保子

編集部／仲 明子





全部自分のものにしたい心

津守 真

二、三歳の幼児の集まりに参加したときのことである。ワーウー泣いている二歳七ヶ月の女の子がいた。積み木をいっぱい抱え、手に持っている物だけでなく、手が届く範囲の積み木をすべて抱えて、隣に座っている子がひとつ取ると、こんな小さな子にと思うほど強い力で取り返し、派手な声でワーウーと泣くのだった。大声を張り上げるところが私にはとても可愛らしく思えた。私は近寄つて一緒に床に座り込んだ。そうすると細かなことが一層よく目に入る。傍らを通るだれかがちょっとひとつ触るだけで泣くので、絶えず泣いているように見えるのである。母親は何とかせねば



と思うらしく、ひとつ分けてあげなさいとか口をはさむのだが、子どもにはそれを聞き分ける余裕はなかつた。手の届く範囲の積み木を全部自分のものにすることによって、自分の中に力が溢れてくるように感じるのは、この年齢の子どもの成長の過程として否定すべきことではないだろう。私はその子たちの中に座つて、どの子もそれぞれに満たされるようにと奮闘していた。

そこにF先生が来た。F先生はその子の顔を見ながら、そつと積み木をひとつとり、三個重ねて、アイスクリームと言つた。今度何にしますかと尋ねると、子どもはチヨコレートアイスと言う。次にはストロベリーアイスと言う。こうして三つ重ねをいくつも作り、ひとやまの積み木が整理されて、アイスクリームのカウンターのようになつた。他の子が手を出したとき、F先生はアイスクリームですよと言つて積み木を渡した。その子もチヨコアイスと言つて他の子に積み木を手渡したり、立ち上がりつまわりを歩いた。自分が抱え込んだ積み木が、ごたごたのままではなくて、秩序をもつて整理されたときに、子どもはそれを他人にあげたり、前とは違う展開になつた。三十分ほどの間の成長である。

この成り行きをじつとそばで見ていていた女の子がいた。小さい子の世話をしたり、いかにもお姉さんらしく良い子に振る舞つていた。幼稚園に行つてゐる四歳の子どもで、私は一歳の差でこんなに違うものかと感心して見ていた。あとで聞いた話である



が、この日ここに来たとき、この子は何を尋ねられても口をつぐんで指でさして答へていたとのことである。あの子のように自分を表現して泣いてもかまわないと分かったとき、後半では、この子はよくしゃべった。部屋中走り回り、大人に追いかけられることをせがみ、大人を相手にいつまでも遊んでいたかった。お行儀よく見えたこの子が、自分の要求をあらわに出して遊んだ。

その翌日のことである。私が養護学校に行つたとき、帰りがけに、一人の子どもが、木の枝をたくさん袋に入れて家にもつて帰りたいと言い張っていた。一個の袋には入りきれず、大きな袋を二つと、さらに箱に入れて木の枝を全部もつて行きたかった。置いて行かせようとすると大声を上げた。だれかが何本か見えない場所にそつと移すと、すぐに見つけて、元に戻した。私はそれを見ていて、昨日の二歳の子どもの積み木を思い出し、どうやつたらこの子の中でこの木の枝の山が秩序づけられるかを考えていた。そのとき母親が、「この子は、何でも整理がつくとそれでよくなるんです。家にもつて帰つてゆっくりやります」と言つた。これまでにも、この子はビーナスなどきれいなものをたくさん集めた時期があり、それを自分のやり方で美的に並べたときに、それを手放せるようになつたのを思い出した。これはこの母親の体験からでた言葉であると私は感心した。



この日の木の枝は母親だけでは持ちきれないでの、職員が一人で助けて母親と三人で抱えて駅まで行つた。帰途、店を見ながら歩くうちに、この子は大きな袋はおいて、木の枝を三本だけ持ち帰つたという。木の枝だけではなく、人間関係を含めて、この子の住む生活の全体がこの子を決して排除していない、この子も参加して一緒にやつて行こうとしていることが分かつたときに、この子は木の枝を手放せた。状況の全体がこの子にとつて整理がついたのだろう。

積み木を握りしめて放さない二歳の子どもは、本人は真剣だが大人には可愛らしく見える。大人にとつてはそれはたいした価値はない、違つた次元から見ているからだろう。子どものこういう姿を、自我の成長の過程としてまず肯定的に見ることは重要であると私は思う。最初からこれを否定したら人間の成長そのものがなくなるだらう。その上で、違つた次元から見てかかわるのである。

大人になると話は違う。大人は日々の生活に直接必要のないものまで欲張つて獲得しようとして、手放すまいとしがみつく。大人の取り合いはときに悲惨である。そこで踏みとどまつて、「天に宝を積む」ということに思い至ると、厳しい現代の現実にも、裂け目が作られるのではないか。

特集 〈緑蔭図書紹介〉

『とつときのとつかえっこ』

— 幼児と高齢者の異世代交流の絵本を読む —

上垣内伸子



昨年十二月に、新しい幼稚園教育要領が告示された。現行の教育要領を基本的にふまえつつ、幼児を取り巻く今日的課題が加えられた改訂であったようだ。新たに加わった文言の一つに「高齢者」がある。領域「人間関係」のねらいの中の、「高齢者」をはじめ地域の人々など自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ」という部分である。改訂に先立つ平成九年十一月に出された「時代の変

化に対応した今後の幼稚園教育の在り方にに関する調査研究協力者会議」の最終報告の中で、教育内容改善の重点事項の一つとして「高齢者等との触れ合い」が挙げられている。曰く、「高齢社会を生きていく幼児にとって、高齢者と実際に交流し、触れ合う体験をもつことは重要である。このため、地域の高齢者を幼稚園に招き、運動会や生活発表会と一緒に楽しんだり、昔の遊びを教えてもらったり、昔話を

特集〈緑蔭図書紹介〉

や高齢者の豊かな体験に基づく話を聞いたりするとともに、高齢者福祉施設を訪問して交流するなど高齢者と触れ合う活動を工夫していくことが大切である」。

もとより、幼児が高齢者をはじめ自分を取り巻く様々な人々と直接触れ合っていくことは重要である

し、幼児と高齢者の異世代交流が両者にもたらす実りは大きい。けれどもそのためには、まず交流の質を問うことが必要となるように思う。

私の勤務校には高齢社会生活研究所という学内の研究機関があり、高齢者に関して、所属学科を越えた共同研究を行っている。私も同僚の先生方と一緒に、乳幼児と高齢者の異世代交流のあり方にについての調査研究を続けている。そこから得た結果として、前記の最終報告にも書かれている運動会などの行事への招待や施設訪問といった、いわば非日常的な交流よりも、むしろ、日々の保育や地域での生活

の中での日常的な触れ合いの方が、幼児にも高齢者にも心に残る交流となることがみえてきた。敬老の日が近づくと手作りのおみやげを持って高齢者施設を訪問し歌を一緒に歌うといった、通り一遍の交流プログラムでは、真の交流は図りにくいように思われる。

一人ひとりの幼児に自分の祖父母や近所の高齢者との関わりの話を聞くと、実際に多様で鮮やかなエピソードを伝えてくれる。「この髪、おばあちゃんに切つてもらったの」「僕のおばあちゃん、若い頃、高速道路でトラックと競走してたんだって」「わたしが、おじいちゃんの車椅子、道が斜めのところでも上手に押せるようになったの」などなど。

他ならぬこの僕・私と、他の誰でもないあのおじいちゃん・おばあちゃんとの交流、さりげない日々の暮らしの中での互いの息づかいの感じられる関わりこそが、高齢社会に生きる子ども達にとって意味

ある異世代交流なのだろう。

前置きが長くなってしまった。異世代交流の研究の一環として、絵本に描かれた交流の質について調べている。その過程で出会った心に残る絵本を紹介したい。絵本の中の子どもと高齢者の日常の交流の

内容は、二つに大別される。（平成九年度十文字短大幼児教育学専攻科境和子の卒業研究参照）いろいろなことを一緒に楽しみ互いが喜びを持って生活している様子が描かれたものと、「老い」を迎え、けがや病気で弱くなってしまった高齢者と子どもの関わりについてのものである。どちらの場合も多くの子どもと高齢者は対等で友だちのような関係であり、前者は仲間として今を共に生きることが、後者は子どもの成長と高齢者の老いという時の流れの中で、ケアされる・ケアするという役割を交代していくことがテーマとなっている。

『とつときのとつかえっこ』（サリー・ウイットマ

ン文、カレン・ガンダーシーマー絵、谷川俊太郎訳、童話館出版、一九九五年／原題 "A Special Trade"）は、後者に属する絵本、作者のウイットマンが自分の祖父をモデルとして書いたストーリーである。

バーソロミューはネリーのお隣にすむおじいさん。ネリーが赤ちゃんの時の毎日の散歩はお決まりの道。オリバーさんちの前の道のでこぼこを通るときにはしつかりつかまり、可愛い犬の頭をなでて、いじわる犬は追い払う。プリン格尔さんのスプリンクラーが回っていれば、しぶきの下を駆け抜ける。二人だけの散歩メニュー。ネリーが歩きはじめるようになつた時、バーソロミューが手をつかむと「イヤ、イヤ！」とふりほどく。助けて欲しくなかつたネリー。だから、バーソロミューはいざというときだけしか手を貸さなかつた。いつもいつしょのふたりのことを、近所の人たちは「ハムエッグ」と呼ん

特集 〈緑蔭図書紹介〉

だ。ネリーは学校に上がり、バーソロミューはもつと年をとる。ネリーは手を貸してあげたいときもあつたが、いざというときしか手を貸さない。バーソロミューの気持ちが分かるから。ある日バーソロミューは階段でころび入院。しばらくたつて車いすにのつて退院してきた。今度はネリーが車いすをおす番。『やりかたは よくしっていた。そうつとやさしく ゆっくり。』昔のように、でこぼこ道に気をつけて、可愛い犬の頭をなでて、スプリングラーを一気にくぐり抜けて。

プリングルさんが かきねからなりだして

いった。

「バーソロミューが あなたを おしていたのがまるで きのうのことみたい」

「それは むかしのはなし」ネリーはいつた。

「いまは わたしが おして、

バーソロミューが すわるばん……。

とつかえっこみたいなものね」

老いていく者と育つていく者との役割交代、それを作者は「とつかえっこ」『trading』という言葉で表現している。大人が果たしていた役割をやがて子どもが成長して受け継いでいくことを継承ととらえて、「バトンタッチ」という一方向的な言葉で表すことも多いが、この本を読むと、相互性をもつた“trading”という言葉がよりふさわしいような気がしてくる。谷川俊太郎の「とつかえっこ」という訛も秀逸である。

ネリーとバーソロミューは、何を「とつかえっこ」したのだろうか。care giver, care takerという役割だけでなく、相手をいたわる気持ち、優しさ、親切、互いの気持ちを尊重する誠実さ、そして温かいユーモア……。相手を思いやる思いやりの心とは、このような気持ちのとりかえっこではないだろうか。何かを具体的に教えてもらつたわけではない。

けれども、寄り添い合つて過ごすことで、互いの魂がいつしか響き合い分かり合つていくのだろう。このことは、子どもと老人との間に限つたことではなく、人と人が交流することの原点にあることのよう思う。

「障害者を障害者と思わない」こと

松原 洋子

中学一年生の少年が、夏休みに友達同士で旅行をしたいと言いだした。東京から青森までの長旅であ

る。それを聞いた母親は心配する様子もなく、子どもたちの出発を見届けると、これ幸いとばかり夫と

類似したテーマの本としては、『さあ歩こうよおじいちゃん』（トミー・デ・パオラ作・絵、絵本の家刊）などがある。お近くの図書館の児童書のコーナーをのぞいてみられたらいかがだろうか。

（十文字学園女子短期大学）

香港旅行に出かけてしまった——。

話題のベストセラー『五体不満足』（乙武洋匡著、講談社、一九九七年）の一場面である。この少年、すなわち乙武さんには先天性四肢切断という重い障害がある。「息子が旅行に出ているスキを狙つて、自分たちも旅行へ行つてしまふ」という、お氣楽さ。はつきり言つて、障害者を障害者とも思つていない」と息子はあきれてしまう。また、こんなシーンもある。偶然街で知り合つたヤクザ風のオジサンに親切にされたと報告する息子に、母親は「それはあたりまえよ」と平然と言つてのける。「だって、ああいう方たちは、ツメるといつても小指一本程度でしょ。あなたなんか、全身ツメちゃつてるんだもの。それは、敬意を表されるわよ」。

『五体不満足』の読者ならば、これを乙武親子の絆の強さやおおらかさを物語るエピソードとして好意的に解釈するだろう。だが、普通、母親のこうした

言動は「無責任だ」「無神經だ」と非難されるのではないか。障害児は特別な保護と配慮を必要とする弱者であるから、危険にさらしてはいけない、傷つけではならない。多くの人々はそれが正しいと信じている。

しかし、乙武さんの両親の考え方には違つていた。彼らは乙武さんが生まれたとき、「強い子に育てる。障害を盾に逃げるような子だけにはしない」という教育方針を定めたという。障害にともなう生活上の不便については、状況に応じて適切な工夫と配慮をする。しかし、障害にそれ以上の特別な意味を与えない。そんな両親のもとで彼らの期待に応えて成長した乙武さんは、二十歳を過ぎるまで自分の障害を自覚したことがなかつたという。障害者を障害者とも思わない両親の態度が、「かえつてよかつた」と彼は断言する。

障害児として特別視しないことが、なぜよかつた

のか。障害学の研究者ギャラファーは、障害に対する態度を考える手がかりとして三つの言葉を挙げて

いる（『ナチスドイツと障害者「安楽死」計画』ヒューレ・G・ギャラファー著、長瀬修訳、現代書館、一九九六年）。

一つは「展開」。個人の特徴を障害によって語る態度である。例えば、努力家の障害者がいれば「障害をバネにしてがんばっている」、怠惰な障害者をみれば「障害のせいで無気力になっている」と何でも障害に結びつけて人格を解釈する。これが「展開」である。もう一つは、障害ゆえに人間としての価値を低く見る「切り下げ」。障害をもつ本人の実感は棚上げにして、障害者というだけで「かわいそうな人」「不幸な人」と決めつける。障害者の存在がまるごと否定的な価値評価と結びつけられるのである。「切り下げ」を徹底していくと、かつてドイツに存在した「生きるに値しない生命」「人間以下」

という障害者の定義、そして障害者の「安楽死」処分に行きつく。

「展開」と「切り下げ」は健常者本位の障害者観であり、障害に対する見方の一つにすぎない。しかし、健常者中心の社会ではこれがまた最も普遍的な真理のごとく通用するため、健常者は障害者に対する優越感を、障害者は健常者に対する劣等感を学習することになる。健常者が障害者に「気の毒な弱者」というラベルを貼るとき、健常者は自動的に「保護者」として優位に立つ。その行為は善意と正義感に満ちているだけに、それが障害者に対する暴力となりうることに健常者は気づかない。

また、小さな頃から医師と濃厚に接触する障害児は、マイナスの自己イメージが強化される恐れがあるとギャラファーは指摘する。「医者から自分自身の定義を障害によってなされ、しかもその障害はいまわしいと伝えられる。だから、自分自身がいまわ

しいのだと思つてしまふ」のである。「展開」と「切り下げる」が障害をもつ自分自身に向けられるため、その子の自尊心は生き埋めにされていく。

だが、乙武さんの両親は、わが子に「障害児」であることを学習させなかつた。それによつて「展開」と「切り下げる」という罠を遠ざけ、乙武さんに「弱者」としての自己認識をもたせなかつたのである。これはある意味で厳しい要求である。しかし、

乙武さんは能力と環境にめぐまれて劣等感に苛まれることもなく大人になることができた。彼は「パス」したのである。

「パス」は、ギャラファードが挙げたキーワードの三つめにあたる。障害者が健常者の世界で成功して、健常者であるかのように受け入れられることを指す。意欲的で有能な子どもだった乙武さんは、与えられた課題を次々とクリアして、教師の期待に応えた。また明朗活潑で友人とのコミュニケーションも

上手だった。なにより勉強ができた。子どもに対しても健常者社会の規範を与える「学校」において、彼は文句なく成功者であつた。だから、周囲も彼自身も、障害者であることをさほど意に介さずに済んだのではないだろうか。

『五体不満足』は、輝かしく瑞々しいエネルギーに満ちた成長物語である。しかし同時に、著者には不本意であろうが、重度障害児を戸山高校、早稲田大学政経学部という偏差値の高い学校に進学させ、立派な好青年に育て上げた母親の成功物語として、教育ママのバイブルとなる余地もある。皮肉なことにも、乙武さんの健常者社会での成功が、この本を健常者文化の能力主義にさほど違和感なくなじませてしまふのである。

ただし、乙武さん自身の障害観も能力が基準になつているようだ。彼は、「環境さえ整つていれば、ボクのような体の不自由な障害者は、障害者でなく

なる」と考へてゐる。障害者の能力を制限してゐるのは環境であり、バリアフリーが理想的に進めば障害は限りなく縮小し、能力的に健常者と変わらなくなるという発想である。しかし障害者のなかには、バリアフリーは障害者を排除してきた能力主義の現代的な姿であり、「できないこと」を拒絶する思想ではないかと警戒する人たちもある。また、障害者の能力を制約する要因を社会的障壁の存在に求めすぎると、健常者とは違う身体の存在を無視し、障害者独自の身体の経験を否定することにつながると指摘する声もある。こうしてみるとバリアフリーといふ考え方は、健常者社会の価値観に近いところにあることがわかる。『障害学への招待』（石川准・長瀬修編著、明石書店、一九九九年）は、このようないくつかの議論の奥行きの深さを教えてくれる。本書は、障害者独自の価値・文化を探る新しい学問・思想・知の運動である「障害学」を、様々な角度から

紹介している。障害学は、健常者文化の対抗文化にとどまらない新しい価値の創造を期待させる。

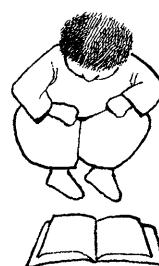
ところで、『五体不満足』には健常者の友達の姿は生き生きと描かれているのに、障害をもつ友達の話は出てこない。この本に登場する日本の障害者イメージは、意外なほど平板である。健常者の間で育った彼は、多くの健常者と同様に、日本の障害者に出会う機会が乏しかったのかもしれない。しかし、今、乙武さんは『五体不満足』で行動する障害者としてデビューした。「こちらのバリアフリー」を掲げる彼は、あえて挑発的なタイトルをつけたといふ。その意気やよし、である。彼の聰明さと豊かな感受性が、「障害」との新しい出会いを実らせることが期待したい。

（お茶の水女子大学）

『消費者教育のすすめ』

消費者の自立を目指して

馬場 由子



人間として生まれたその瞬間から、人は消費者になる。たとえ親がかなりの手作り派だとしても、現代では消費活動なしに生きることはできない。おむつや肌着も、産湯に使う水や、それを沸かすガスでさえ他人が生産したもの消費することになる。地球環境悪化が叫ばれてから久しい。消費活動をす

ることで環境を破壊している場合もあり得る。生活を見直し、賢い消費者になることで、地球環境の保全に寄与することもできる。幼少時からの消費者教育により、環境や生命を優先させた経済活動を開く賢い生産者を育てることも可能ではないだろうか。

教育に携わる者が消費者としての自覚を持ち、消費者教育に関心を持つことは、次世代の自立した賢い消費者を育てる上で不可欠である。それが健全な地球の未来を守ることにも繋がると信じる。消費生活専門相談員という資格がある。国民生活審議会の決議に基づき国民生活センターが行う試験で認定される。消費生活センターの相談員はこの資格を持つことが多い。十数年間主婦としても生活クラブ生協の組合員としても消費活動をしていながら、私はこの資格を取るまで自分が消費者であるという自覚を全くもつていなかつた。環境問題や消費者問題についても恥ずかしいくらい無知であった。自身の反省を込めて、子どもたちには消費者として何をすべきかを伝えようと思つてゐる。

本書（米川五郎・高橋明子・小木紀之編、有斐閣、一九九六年）は主に消費者問題と消費者教育の必要性について述べている。地球人としてどのよう

な消費者であるべきか、消費活動と地球環境問題にはどのような関係があるのか、というような本質的な問題について具体的に触れてはいない。ただ消費者教育が大切であるという点で、一人でも多くの方が興味を持って下さることを願いつつ、此所に本書の概要を紹介させて頂くことにする。

国民はすべて消費者である。二十一世紀を目指す

前に消費生活は、著しく変貌しようとしている。消費者問題の背景と見られる情報革命を伴う高度な技術革新、寡占の進行による消費者の弱小化、巧妙なマーケティングの進展、販売方法の多様化等は拡大、発展し、生命・健康を脅かす安全性や品質問題、サービスや販売方法、契約問題、悪質な販売活動による被害等は大型化、多様化し、事態の深刻化が予想される。このような状況下では、自分自身の確固たる価値体系を基に、合理的な商品選択が実現でき、自

特集 〈緑蔭図書紹介〉

分らしい生活を営める自立した消費者であることが望まれる。自立した消費者を育てるには、生涯教育としての消費者教育が最も望ましい。

消費者教育によって、主体的、自覺的な消費者が形成されることは、単に個々の消費者が現代社会によりよく適応し、合理的な生活を営むことが可能だけではなく、公正で住みよい経済社会を発展させることに貢献する。消費者の苦情や被害を未然に防ぐことにもなり、行政にとつても望ましい。企業が、消費者情報を提供し、消費者の知識を高めることは、企業の成長力を高め、市場を拡大するために重要なことである。消費者問題や公害・環境問題などに対応しなければ、企業の存続が危うくなる時代を迎えていく。「受験体制」といわれる状況のもと、子どもたちが消費者としての資質・能力を身につけるための教育が軽視され、家庭や地域に根ざし

た生活経験と結びつけた教育実践が行われていないのが実情である。小さい時から生命や生活の大切さ、生活の質などについて考えさせるため、人間形成を本質とする学校教育で消費者教育を行う意義は大きい。成人になつてからの学習では、対処療法に役立てるにとどまる。普遍的・体系的に学校での消費者教育が必要になる。児童・生徒は将来成人になれば生産者として経済活動に従事するものも多く、市民として社会を創造する主体者になる。消費者をとりまく環境が大きく変化しており、国際的な市場開放に対応する消費者教育を考えるについても、学校や家庭、消費者団体など、単独ではとても解決の道は求められない。企業には社会的責任、行政には弱者を保護する責務がある。消費者は連帶して自立しなければならないし、そういう消費者を育てる消費者教育が、学校において

て実現されなければならない。教育とは時間のかかる営みであることを考慮し、長期的視点にたって、生涯学習における消費者教育の位置づけを確立することが急がれる。高齢化社会への対応も、重要な課題である。

本書に同感である。消費者教育は、消費者問題の加害者を育てないためにも大切なことである。消費者教育支援センターからヴィデオを借り、小学六年生に消費者問題について授業を行った。大人並の体格を持ち、塾通りで繁華街を歩く児童にとって、悪徳商法も無縁でない。実際に街で声をかけられた子どもいる。生活者として、地球環境問題にも子どもたちの関心は高かった。消費者教育支援センターで貸し出している「水」、「ゴミ」、「熱帯雨林」、「石油」をテーマにした『地球にコンタクト』というヴィデオは、子どもたちに環境問題を考えさせるのに大変役立つので、是非ご覧になつて頂きたいと思う。こ

のヴィデオの中の「水は大昔からずっとリサイクルされている。恐竜が飲んだ水、クレオパトラやナポレオンが飲んだ水、それを今私たちも飲んでいる」「ゴミは燃やしてもなくならない。ガスに形を変えただけ」という言葉は大変印象的であった。

現在中学校の家庭科では消費者問題を扱っている。「消費生活は、自覚と責任から」、「よい生活への、目と行動」、「地球を守る、地球と生きる」、「くふうしよう、実行しよう、エコロジー」というような標語が書かれた教科書もある。子どもたちが小さい時から周りの大人たちが消費者としての自覚を持つて接すれば、教育効果はより上がるのではないかだろうか。空調に頼らず、衣服の着脱や窓の開閉で気温の変化に対応することも幼少時から習慣で身につく。たとえ牛乳パックのリサイクルなどを心がけても、再生紙のトイレットペーパーやティッシュペーパーを使わなければ、余剰古紙が溢れてしまう

だけだ。分かることと実行することが一致して初めてリサイクルの成果は上がる。幼稚園で折り紙を使う時、お弁当を食べる時、園児は消費者である。園

児の親も消費者である。園児とその親を賢い消費者に育てることができたらと願っている。

(お茶の水女子大学附属小学校)

『愛の妖精』と『銀の匙』

渡辺 純一

子どものころの夏休みのうれしさはたとえようがない。日中のうだるような暑さと朝夕の涼しさが独特のリズムを作っていた。朝は学校に通うときよりも早起きして涼しいうちに宿題をすませる。日が高

くなるとともに勉強どころではない。近所の桜並木に蟬取りいでかけたり、炎天下新設の市民プールに歩いて通つた。夜は蚊帳を吊つてその中に寝た。

和机に参考書を積み上げ問題集に取り組んでいる

と、時々庭に面したガラス窓から風が入ってきて開け放なしの家中を吹き抜けていく。外には庭木の葉のつややかな緑が陽に輝いていた。母が一冊の本を渡してくれたのはそんな夏休みのことだった。

バラフィン紙のカバーに赤色の帯がついた岩波文庫で、フランスの女流作家ジョルジュ・サンドの小説『愛の妖精』であった。『トムソーヤの冒険』や『宝島』に夢中になっていた小学六年生にとってはずいぶん恥ずかしい題名で、母の意図がはかりかねたが、読みはじめるとたちまちひきこまれてしまつた。

【フランス中部の農村地帯ベリー州を背景に、野生の少女ファデットが恋にみちびかれて真の女へと変貌をとげていく。ふたごの兄弟との愛の葛藤を配した心憎いばかりにこまやかな恋愛描写はこれをサンド（一八〇四—一八七六）の田園小説のうちで屈指の秀作としている。主人公は少女時代の作者自身を

モデルにしたものだという。】現在出版されている同書の表紙には前記の解説が印刷されている。

働き者のバルボーにさすかつた玉のような一卵性双生児の兄弟はいつももいつしょに育てられ気持ちのいいほどよく育つた。気だても実におとなしくおだやかだつたが、やがて二人はそれぞれ違った運命が授けられ、まるで違った人間だということがわかつたのだつた。一方、めぐまれない境遇に育つた貧しいヒロインは、あだなが「こおろぎ」、目の大きなところだけが自分でも気に入っている色の黒い器量の悪い女の子。しかし、弟のランディーに恋した心のやさしい少女は、持ち前の知恵を發揮してかれの心を捕まえる。心ないうわさ話が広がると、静かに街を離れて身を隠す。やがて医術を学んで戻つてきた彼女は美しく変身し、おばあさんが残した遺産のおかげで突然豊かになつてめでたくランディーと結ばれる。嫉妬深い兄は初めは弟の愛情をめぐつて彼

特集 〈緑蔭図書紹介〉

女と争うのだが、後には彼女の聰明さに惹かれて愛するようになる。そして……。

サンドが本書の構想を得て執筆したのは、パリコ

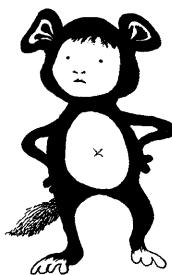
ミューランが民衆側の惨敗に終わつた一八四八年、黒船が浦賀にくる五年前のことである。宮崎領雄による邦訳が岩波文庫から出版されたのは、昭和十一年。もし、その時に母が読んでいれば同じ年頃だったはずである。すっかり読書に夢中になつて勉強がおろそかになつた私の様子に驚いたのか、母はその後しばらく何も言わなかつた。

『銀の匙』は友人に教えられて読んだ。彼が通う関西の進学校では中学一年生の国語の教科書になつてゐるという。作者中勘助は明治十八年東京は神田の生まれ。岐阜今尾藩士であつた父勘弥が明治維新後も家令として勤めていた藩邸に生まれ、四歳で小石川区に引っ越した。生来虚弱で生まれるとまもなく大変な腫物で、毎日まつ黒な煉薬と烏犀角を飲ませ

られた。そのとき子どもの小さな口へ薬をすくいいれるのに伯母さんがわざわざがしてきてくれたのが『銀の匙』であつた。

作者は信心篤い伯母さんの背中におぶわれて神田川のふちのお稻荷さんにお詣りしたり、伝馬町の牢屋あとのお皿のある怪しげな河童の見せ物や、駄鳥と人間の相撲を見たりして大きくなつていつた。迷信家の伯母さんは、毎年お盆に閻魔様のお寺につれていた。線香の煙がむんむんとこもつてゐるなかでぎやんぎやんぎやんぎやんひつきりなしに鉢をならす。そこで閻魔様と三途の川のお婆さんを見せるのであつた。ひとみしりの強い子どもであつた作者のために一生懸命遊び仲間をさがし、

お向こうのお国さ



んという女の子が見つかると、蓮華の花ひらいたを家で根気よく教えて下稽古をやらせ、それが立派にできるようになつたら遊びの輪に加わらせた。かくれんぼするときお国さんは、「昨日裏の藪から三目小僧がでた」などとおどかしてから竹藪に隠れたので、恐くなつて寄せなくなつた。彼女の父親の仕事の都合で遠方にこしていつたあと、おけいちゃんが引つ越してきた。勝ち氣で人なれた子で、ほんやりな同級生に対してもかく女王のようにふるまう気味があつたが、学校からかえると復習予習もそこそこに裏畠で石蹴りや縄跳び、鞠つきに熱中した。あやとり、うつしえ。おさななじみの思い出はうらやましく、帰らぬ昔が思われる。

伯母さんの親身な世話のおかげで次第に人ともうちとけるようになった作者は、小学校ではやさしい先生たちの教えを受けて、鋭い批判精神を育んでいった。

修身の授業で孝行を百万遍も繰り返されるのを聞いて、「なぜ孝行をしなければならないのか?」と問いかける作者に対し、新任の丑田先生は、最も下等な意味での功利的な説明を加えるよりほか能がなく、しまいにはかつとして「孝行のわかる人手をあげて」と命令した。そして「ひよつとこめらは、われこそといわなればかりにばつと一斉に手をあげた」のであった。作者の批判は日清戦争中の熱狂した愛国心にも向けられた。「日本人に大和魂があれば支那人には支那魂があるでしょう」。

修身が道徳に変わつてからも、ひよつとこめらははびこる一方で、学校では「いじめ」が横行している。作者はその背景に先生の陰険な生徒操縦法のあることを見抜いていた。教師がその後もこの有効な手段を用いて常にひとの質問を鎖そとしたので、彼はまたその屈辱を免れるために修身のある日にはいつも学校を休むようになつた。それでいて、大好

特集 〈緑蔭図書紹介〉

きな中沢先生には家の庭の棕櫚の枝で鞭を作つて進呈し、「頭をたたくにはこれがいちばんだ」と言われて喜んでいるのであつた。

ふたりの先生の違いは一体なんだろうか。生徒を自分より劣つたものとして高圧的态度で接するか、一個の独立した人格と認めて対等に接するか、の違ひではないか。子ども時代の丑田先生は、親から頭ごなしに孝行を強要され、口答えなど許されなかつたのだろう。

人間関係は人に生まれつきそなわった能力ではなく対人環境の中で次第に成長していくものであるから、物心つく頃にやさしいひとたちに取り囲まれているか、あるいは、子どもの個性を認めようとしたい大人に取り囲まれているかの違いによつて、よくもなり悪くもなっていく。対等の人間関係を結ぶことのできない「権威主義者」のもとではいつでも同じ状況が生じるであろう。いまや、小学校から大学

まであまりにもありふれた風景になつてしまつた「いじめ」のルーツはこのあたりにあるのではないだろうか。幼児期のこころの教育の影響はじつに大きいと思われる。

ひとつひとつの暮らしぶりは国によつてまた時代によつてさまざまに変わつていくけれども、子どもたちの思い出がいつも幸せに満ちたものであるよう願わずにはいられない。

(東京大学医科学研究所)

幼稚園の日々

たたずむ場、休む時

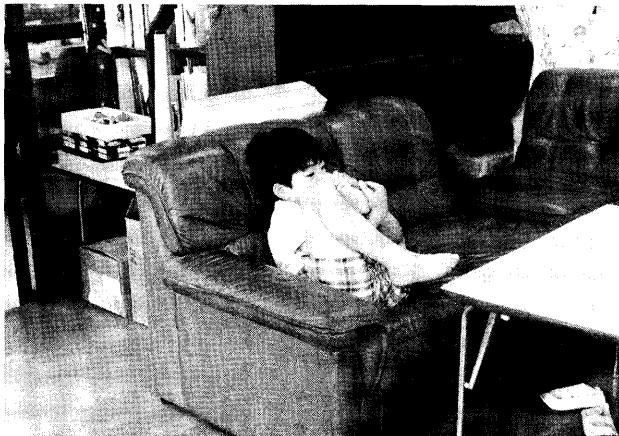
幼稚園での発見と探索と関わりという積極性の合間に、ぼんやりして眺めたりもする。退屈そうであったり、疲れを癒したりしている。生き生きした動きに移る前にこれからすることを探しているのか、単に身体を休めているのか。興味深いものを見いだして、思わず見入っているのか。いつかやってみたいなあと思いつつ、心に留めているのかもしれない。集中は拡散と沈滯の裏側である。熱意は退屈と一体だ。ぼんやりすることが次の集中をいかに用意するのか。幼稚園の環境の広がりはその用意を密かに企んでいる。その企みを子どもはいかに自分のものとするのか



◀きれいだなあ。それとも自然の不思議さに見入っている?



▶ベンチでひなたぼっこ。何もやることがないときに、ここに座って他の子の遊びを眺めたりしている。



▲応接室のソファは「じろん」と休む場にもなつて
いる。



▶三歳児が二階からホールをのぞいている。



◀ホール前のテラスでぼーっとしている。

写真・樋口早百合
解説・無藤 隆
協力・目白幼稚園

攻撃的感情を治める

友定 啓子

はじめに

前二回で、最近の幼児の攻撃的行動についていくつかの事実を述べた。今回は、攻撃・怒りそのものについて、考えてみたい。少し迷走状態になるかも知れなけれど、お許しいただきたい。

幼児と中学生

私は教育学部にいるので、小中学校の現場の先生と話す機会がよくある。そこで幼児の話をすると、中学生と全く一緒だといわれることがよくある。中学校の先生から、「待てない生徒がいるんだけど、そういう

「ことはいつ教えるの?」などと聞かれたりする。一般にいう幼児期でクリアしているはずの基本的行動が全然できないらしい。そういう中学生に、家庭科で保育を教えるわけであるから、現場では幼児のことを教えるような形をとりながら、実は中学生自身の生活改善をねらつたりしている。

私自身も近年、幼児の行動や感情を記述していると、それにひきずられて、中高生の行動が浮かんでくる。それだけ似ているのだ。ということは、その一〇年間、ほとんど成長していらないということになる。

先日、大学院の授業で、幼児の行動について細かく書いた文章を読んで、討論に入った。受講生に現職の中学校の先生がいて、「このままの生徒がいる」と発言した。思わず「このまんまって?」と聞くと、「この通りですよ、自分の思い通りにならないと、いきなりものに当たる」「ものに当たるって?」「ガラスです。ガラスを素手で壊すんです。手が切れてけががするんだけど。それからドアを蹴破る。壁に当たると

か」「それは主に男子?」「いや、男も女も」「えつ、女の子も当たるんですか」「そうです」。

「思い通りにならない時って?」「自分の意見が通らない時。」「たとえば?」「卒業アルバムを作つていて、どの写真を載せるかという時に自分の載せたい写真が取り上げられなかつたとき。いきなり、そばの窓ガラスをぶちやぶる」。思わず「そういうとき、先生方はどういう風に対処するんですか」と聞くと、決まっているようで、けがの手当をする人、保護者に連絡する人、話を聞く人、周囲の生徒を治める人など手分けしてあたるとのこと。どうもその話からは、中学校ではそんなに珍しいシーンではないようだつた。

「それで、その子はその気持ちが治まるんですか、納得するんですか」と聞くと、「いや、そうでもないけど、でもまあ、ガラスを破つてスカッとするというか」という答え。で、私はしつこく聞いていく。「なぜ、ガラスですか? 他のものじゃなくて」「いや、ガラスがそこにあるからですよ。話している横に窓が

あるので」「ガラスは、壊すとすごい音がして、スカッとするし。それに、ガラスを壊せる強い自分だといることもあるし。あと、周囲に対し、こんな風に自分はすごく怒っているんだという表現でもあるんですね。けがをすることは考えていないんです。他にドアを蹴ります。ドアは安物だと、穴があくし、壁は靴の跡が残るし」。

なるほど、その中学生にとってガラスを割るという行為は、自分の怒りを表現するための行動らしい。

ことばと思考の喪失

しかし、その表現は何の役に立っているのだろうか。もしその子に、ことばがあつたなら、この写真はこれこれこういうわけで、アルバムに載せたいんだと言えただろう。そして、相手も自分はこう考えるから、別のがいいと言つたなら、またそこで、どうしようと話が進むはずだ。そしてそれで納得して自分の意見が採用されなくても、自分で気持ちを治めること

ができるかもしれない。もちろんいやな思いは残るだろうが、その思いもことばで表現できれば、新たな方向ができる可能性もある。今回はこうだつたけれど、次回はどう思いになるかもしれない。さらに、子どもたちの間に、採用されない人の気持ちに対することばがあれば、自分が全面否定されたと思わずに、怒りまで至らなかつたかも知れない。そういう思考過程がすべて吹き飛んでしまっている。

自然からの逆照射

このような悔しさやつらさのようなマイナスの感情を、人はどのように自分の中で治めていくのだろうか。それぞれのやり方があるとは思つが、そこにはいつも自分を映しだしてくれる自然や人のことばがあるよう思う。自然は何も言つてはくれないが、逆に無言であることによつて、人は自分の思いと向き合えるのではないかと思う。

ガラスではなく壁はどうなのかと考えたときに、ひ

とり砂場で長時間穴を掘っていた子どものことを思つた。そして、大地は適度な抵抗で、自己に対抗していくという、バシュラールの言葉を思い出した。壁やガラスのような人工物にぶつかつていつた時と、土や砂や水や生き物のような自然物に向かった時とでは、ふところの深さが違う。昔のワンパターンの青春ドラマでの、夕日に向かって海辺を走つたりするシーンも、その典型的表現とも考えられる。受け止めきれない自己の感情をそうやつて昇華させることができた。そういう空間や時間があった。自然に包まれたり向かい合つたりしながら、自分を見つめることができた。

ちっぽけな自分に気づいたり、自分の間違いに気づいたり、認めたくない自分の感情を直視したりすることができた。今、そのような場所や時間が子ども達に残



されているのだろうか。逃げこむ先が自分の部屋では、そこはあまりにも饒舌で、自分を見つめることは難しいのではないか。

谷川俊太郎の『あな』という素朴な絵本がある。このお話を、日曜日の朝、なにもすることがなかつたので、僕は穴を掘り始めた、ということから始まる。無心で、しかし全力で大地を掘る僕に対して、周囲の人々が様々なことばを投げかけてくる。最後に穴の底にじっと座つたときに、僕は僕だということに出会う物語だ。自己認識の本である。このように直接自分の五感で自然に対峙することが、自分というものを認識し、再生させるのに重要な時空間だと思う。

他者のことばに出会う

私自身は、否定的な感情でやりきれないときには、どういう風に自分をなだめるかといふと、たいてい本を読むことにしている。ちょっと自分と離れたことばに向かい合つ

ていると、ちっぽけな自分に気づかされ、いつのまにか怒りがおさまっていることが多い。お説教ではないことばが、自分を立ち直らせてくれたり、元気を与えてくれる。昔読んだたくさんの詩や文学が自分を支えてくれているということも思う。

NHKドラマ「すずらん」は、主人公の少女がいくつもの苦しみを乗り越えて成長する物語だが、何も持たない彼女が生きる支えにしていたものは、大自然そのもののことばである。それは詩であったり、周囲の人たちのことばであつた。つらさや悲しさに直面した時、支えにするのは他者からのことばのメッセージだ。

前述の中学校の先生は、今の中学生は表現力が足りないから、ディベートなどが必要だといっておられた。それもいいかもしれないが、相手をうち負かすことばを探す以上に、それ以前に自分をみつめることば、他者を理解することばに出会わせてやりたいと思う。

今の子ども達は、昔とは比べものにならないくらい、大量のことばの中にいるが、あたたかいことばや毅然としたことばにはあまり出会っていないよう思う。

『ムカツク構造』の著者の齋藤孝氏は「ムカツク」という価値感覚をのり越える主要な方法の一つとして、読書をあげている。他者のことばに出会う、それはそのことばに対峙して自分の感情を相対化することになるが。

幼児は内言を持たない

幼児は、自分の感情をあまり自覚していない。自分の否定的な感情がすぐに他者に向けられてしまうこともある。そういう状態になつたとき、保育者が「悲しかったね」「痛かったね」「○○ちゃんに、とられていたんだね」などと、こちらがことばで気持ちを表してやる。そうすると子どもは「そうだよ、悲しいんだよ」「さびしいんだよ」と、自分の状態をことばで表

現できることを知る。そうやってわかつてもらえるだけで、怒りに転化せずにすむ。幼児は思考過程ができるがつてない。感情や感覚の中にある。そこに、外からことばが与えられることによって、表現のすべを学ぶ。ことばが難しければ、行動でもいい。向けても差し支えないものに怒りを向ける方法を教える。

怒りは行動に結びつく。怒りは自分以外のものに責任があつて自分は悪くないという表明だ。相手が自分を怒らせたので、相手が悪いんだと考えるので自分を見つめる契機にはならない。怒りの感情は、自分の側に引き寄せなければ、それを克服することにはつながらない。

自分がなぜ怒ったのか、そこにはもう一つ前の感情があるはずなのだ。そこを自覚し、解決しなければ、怒りの感情は消えない。ましてや人を攻撃しても、感情はおさまるかも知れないが、問題は解決しない。攻撃が攻撃を呼ぶことになることもある。

攻撃の快感

これまでずっと私は、攻撃行動はコントロールされるべきものとして、扱ってきた。しかし、一方でガラスを割って「スカッとする」という、前述の表現にも見られるように、攻撃行動は本人にとつては「快」であるという事実がある。意地悪をしたり、人の悪口を言うのも快感がある。そしてそれをもつとも端的に示すのが「攻撃の笑い」である。優越感に基づいた笑いである。相手を否定することが自分にとって快であるというこの現象を、人間は乗り越えることができるのだろうか。

一方の快が他方の不快であがなわれるというこの関係が、人間の持つ不条理なのかと思うことがある。人ととの関係は、共生にもなり、競走にもなる。競走の場合、一方の勝利は他方の敗北である。

昨年の保育学界のシンポジウムで酒鬼薔薇事件が取り上げられたが、その中で、本田和子氏はあの事件で

は、少年達から「どうして人を殺してはいけないのか」という問いかけが発せられたのだと述べていた。それまで嘗々と積み上げられてきた「人を殺すなかれ」という価値観に、疑義が唱えられたのであって、そういう深い地平からの問いかけなのだとということであつた。

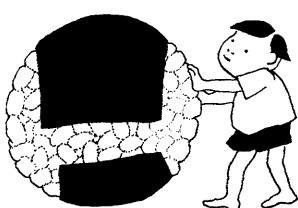
そういう正反対のことが起こる。つまり、自分にとつては快感であつてもやつてはならぬことがあるとすることをわからせるというのは、その子の中に、他の視点を持ち込むということもある。その表裏一体の関係を自分も引き受けていることでもある。あなたの快が相手の不快になることがあるのだということを伝え、それはコントロールすべきなのだといわなければならない。いずれわかるようになるということではない。

いじめだって、本人は「僕は強い」といつて、弱い子を戦いごつこと称して蹴つていたりする。まさに自分にとつての快感なのである。自己の視点のみではお

もろかたり、遊びだつたりして、悪いことなどは感じとることはできない。いじめているという自覚は他者の視点を持ち込まなければ、決して出てこないものだ。セクハラも差別も同じ構造を持つている。

表現としての攻撃

行動は表現であると考えれば、攻撃もまたひとつの表現である。再び元に戻るようだが、攻撃というのは、いくらことばで語りかけてもわかつてくれないとき、最後の表現手段として、用いられることがある。親が子どもにいくら言い聞かせても伝わらないと思つたとき、つい手が出るのがいい例だ。逆に、はじめからことばが出なくて、攻撃になることもある。怒り心



頭でことばを失つてしまつた時か、自分で状況がつかめず、言えない時だ。はじめにしろ後にしろ、ことばという表現媒体が使えないときにそうなる。だからそれをことばで表現せよということが無理といえば無理なのかも知れない。

幼児期に、自分の感情をことばで表現せよということのは、かなりたいへんなことである。それには、大人がよいことば環境を用意してやるしかないだろう。攻撃行動のコントロールができるような体験を共に作つていくしかない。怒りにまかせて行動してしまい、他者をそこなう自分であつていいはずがない。それでは他者と共存できない。

イノセンスの表明

前回まで取りあげた幼児の攻撃行動は、ねじれ表現ともいえるもので、いきなり殴りかかつてくるというものだった。攻撃的行動の陰に隠れた感情を見つけ、

それのことばを与えるながら、相手の感情の昇華につき

合う。が、多くの場合、こつちを向いてほしいというサインだと受け取った方がいいようだ。集団になると收拾がつかないという問題は残つてゐるが、また、相手の優しさを利用して、やりたい放題をするという攻撃は、他者の視点が欠けているということだ。幼児だからわからぬといわずに、これにはやはり、他者として毅然と表明していくしかない。

現代の子どもたちが攻撃的感情をため込んでいるという指摘は、あちこちでなされている。それは、自然環境の破壊から、発達環境の剥奪、人間関係の崩壊、メディアによる直接体験の放逐、競走的環境による異常な緊張など、もはや人間として育つていくための基本条件さえ危ういこの社会のありようへの、彼らの無意識の抗議なのかも知れない。ふつうの子でいることさえ許されない社会へのイノセンスの表明ともいえる。

「ミニユーニケーション能力を考える③

日本語の開国と「ミニユーニケーション教育

村松 賢一

内向きのことばと外向きのことば

少し前になるが、夕方乗ったバスの中で感動的な光景に出会つた。車内は学校や勤め帰りの乗客で身動きもとれないほど混んでいた。こんなとき、両手がふさがつたまま、自分が降りる停留所が近づくと、誰か降車ボタンを押してくれないと氣を揉む。チャイムが鳴るとほつとする。でもそれからが一大事だ。皆、人波を肩で搔き分けながら、大抵無言で出口に突進する。とあるバス停に近づいたときである。「すみません。誰かボタンを押してください」。小学生の男の子とおぼしき声があがつた。なるほど、この車内では小

学生の手が伸びないだろう。応えるように、すぐ赤いランプがついた。感心が感動に変わったのはその後である。彼が即座に「ありがとうございました」と言つたのである。読者はこういう場面によく出くわすだろうか。私は長い通勤生活ではじめてであつた。考えてみれば、当たり前の話で、こんな些細なことに感動する方が異常なのかもしれないが、無言化する都会では滅多にお目にかかる清々しいコミュニケーションの一瞬であつた。降りていく姿を見ると、小学校も高学年の男子であつた。日本も捨てたものではないなど思つたのは、外国でのあれこれの体験を思い出したからである。

カナダのスキー場でのことであつた。ゲレンデを滑り降りてきたスキーヤーが何人も、リフト乗り場の行列に向かつて何やら大声で呼びかけるのだ。よく聞くと、「シングル?」と言つてゐる。誰か一人で来ている人はいませんか、という意味だといふことがしばら

くしてわかつた。二人乗りのリフトに一人で乗るのはもつたない、またその方が待ち時間を節約できるという合理的な考え方から出た知恵なのである。「イエス」という声があがると、即席のペアを組み仲良く相乗りして上がって行く。

また、別の場所にあるロープ式リフト（一本のロープが下から上へぐるぐる回つていて、スキーヤーは両手でロープをつかみながら上へ引っ張られていく）ではこんなこともあつた。大勢の幼稚園児を引率してきた若い女の先生が、やはり、順番待ちの列に向かつて、「どなたか、子どもたちを連れてつてくれる人はいませんか。子どもの扱いに慣れている方にお願いしたいんですけど」と呼びかけたのである。すると、たちまち、何人かのボランティアが名乗り出



た。ほとんどが男性であった。彼らは、一人ずつ幼児を預かり、大きな身体に包みこむようにして、手際よく、無事子どもたちを連れ上げたのであった。これも、日本では考えにくいことだと思った。私たちは、普通の人間が、隣の人に話しかけるように、不特定の公衆に向かってメッセージを発するという習慣をもつていいないといってよい。混んだ車内に乗り込むときも降りるときも、すみませんの一言すら発しようとしないのだから。

それに比べて、と考え込んでしまった。あの携帯電話でのおしゃべりは何なのだろう。乗り物という公共的な空間にもかかわらず、誰はばかることのない大声をあげているではないか。この無言と饒舌は矛盾しないのだろうか。それとも、両者はメダルの裏表にすぎないのか。バスの中での愚考はしばらく続いた。

もう一つ、日本との違いに頭を殴られるようなショックを受けたことがある。仕事で二年ほど家族と

オーストラリアで暮らしたときのことである。帰国のお日が近づいたある日、小学四年の息子の友達を招いてお別れ会をした。こういう場合、彼の地では、小さな客人を喜ばせるため、親があの手、この手の工夫を凝らすことを知った私たちは、近くのプールに連れて行つてミニ水泳大会を開くことを計画した。ところが当日、肝心の息子が熱を出して寝込んでしまったのである。日延べする余裕はなかつたので、しかたなく、息子を家に置いたまま、五、六人のゲスト（なぜか全員男の子）とプールに出かけた。家に帰つて、食事をし、ケーキを食べて（このときだけ息子が起きてきただ）、今日は折角来てくれたのにご免ね、ちょっと早いけどこの辺でお聞きに……といつて送り出そうとしたときである。一人がこんなことを言い出した。「ミスター、ムラマツ、ちょっとお礼のスピーチをしたんだけどいい？」驚いた。プールでの彼らの悪がきぶりから想像できない申し出だつたからである。びっくり

して座り直した私たちに對して、彼は、ごく普通の調子で、次のように話した。今日はリュー（息子の名）が病氣で残念だった。でもミスター、ムラマツがブルに連れて行つてくれてとても楽しかった。せつかく友達になれたのにもうお別れなんて悲しい。でも僕たちはリューと皆さんのこと決して忘れないでしよう。だから皆さんも僕たちのこと、それにオーストラリアのことをいつまでも忘れないでほしいんです。今日は本当にありがとうございました。彼に続いて全員が思い思いのことばの花束を贈つてくれた。エリート校の子弟ならいざしらず、みな、移民が多い地域の普通の小学校の子どもたちである。滞豪生活の中で、このときほどカルチャーショックを覚えたことはなかった。そして、ろくに彼らの來訪をねぎらうことなく帰った。そうとした我が言語文化の貧しさを恥じた。

どうやら、彼我のことばの使われようにはだいぶ違ひがあるようである。私たちは、親しい相手、内側の

相手とは、たとえ公衆の面前であろうとよくしゃべるが、初対面の相手、外側の相手とは、たとえ、同じアパートに住んでいても知らん顔で通す。また、分かつていることはあえて口に出そうとせず、ことばを理解するより意図を察する能力を尊ぶ。どうも、ことばが内に向かって閉じているのである。ところが、私が住んだ外国では、ことばは、知らない者同士を結びつけるためにこそ存在するという趣があり、人間関係の維持より創出に力を發揮する。気持や心はことばに出さないと通じないと考えられ、一々明確に言い尽くす態度が好まれる。ことばが外に対して開かれているのである。これは、どちらがよいという問題ではない。文化や歴史の違いである。問題は、しかし、これからだ。国際化や価値觀の多様化がすすみ、世代間のギャップが広がるにつれ、考え方や習慣を異にする人々との共生が大きな課題となる二一世紀を考えると、このままよいとはとても思えない。これからは、これ

まで内向きに精練された日本語を、外向きにも発達させていく努力がどうしても必要である。次に紹介する外国人の声は、そうしたことばの開国を私たちに迫っているような気がしてならない。しばらく耳を傾けてみよう。

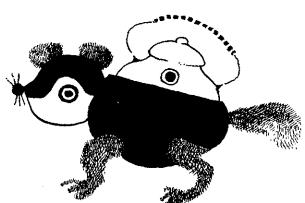
もとめられるコミュニケーションスタイルの変革

つい最近、新聞にこんな投書がのつた。

私は去年、日本語を勉強するために日本に来ました。短い間ですが、ケニアと日本の違いが分かることになりました。まず、ケニアの習慣では、知らない人にでも、会った人にはあいさつをするのが普通です。とくに朝家を出るとき、道で知らない人でもあいさつの言葉をかけると、幸せな気持になります。つまり、あいさつは幸運を授ける言葉です。だから私は日本に来たばかりのころ、一ヵ月ばかりの間、毎日学校に行くときに、よく

日本人にあいさつの言葉をかけましたが、なかなかここたえてくれませんでした。おじさんたちは聞こえないふりをして速く歩いていく。若者たちは、ハンドバッグをしつかり持つて、怖い顔をし

て、たぶん私は頭がおかしいと思いながら歩いていく。ところが、いつも朝ごみを出しに行く時に見かけるおばあさんたちは、よく「おはようございます」とか「行ってらっしゃい」とか言つてくれて、本当にうれしく、大変感謝しています。やはり、おばあさんたちの心は温かいです。（日本語学校生、二六歳。朝日新聞、九九・三・二九）



カナダでもオーストラリアでも、知らない人に声を

かけるのはマナー違反とはならなかつたが、ケニアでもそだとは知らなかつた。通りすがりに目が合ふと、につこり微笑んで、いい天気ですねと声を掛け合う。最初は照れくさかつたが、確かに何とも幸せな気持ちになるものだ。この例はまだ文化のちがい、で済まさるかもしれないが、知らない相手には気軽に声をかけないという私たちの習慣は、留学生と日本人学生が一つ屋根の下で暮らそうとする、深刻な誤解の原因になりかねない。数年前の新聞の投書である。

韓国にいた時、日本の若者と個人的に付き合う

ことがとても難しいと聞いていましたが、本当に

こんなに大変だとは思いませんでした。（中略）

隣の部屋の日本人学生も、台所とトイレと一緒に使つているのに、今まで一回もあいさつをしたことがありません。アメリカ人が付き合いにくい日本人と親しくなるのに、食べ物を作つて一緒に食べたという話をテレビで見て、私も隣の部屋の学

生に国の料理を作つて一緒に食べながら親しく話をしようと思い、機会を何回も作りました。でも、結局、今も前と変わつていません。とても悲しいことだと思います。今まで十ヵ月間、がんばつても付き合つことが大変な日本の若者。一体、理由は何でしようか。あと数ヶ月で私は国に帰りますが、最後に、もう一度声をかけてみようかなとも思つています。日本の若者よ、もつと心を開いてください。（朝日新聞、九三・一・二三）

これとそつくりの話は、筆者が勤務する大学の留学生たちからも幾度となく聞かされた。そのつど、別に外国人だからではなく、日本人同士でもよくあることであり、都会では他人の関わりをなるべく避ける傾向があるのだなどと説明するのだが、駅前の交番のおまわりさんにも明るく挨拶する彼らを納得させるのは難しい。実をいえれば、いま全国の、日本人学生と留学生

が起居を共にする国際学生宿舎ではもっと問題が深刻で、たとえば、料理の後始末や冷蔵庫の管理、ごみ出しなど、共同生活の一つ一つのルールをめぐって軋轢が絶えず、時に感情的な対立にまで発展する例が少くないといわれている。その大きな原因が、留学生と向き合い、議論することを避けようとする日本人学生の態度にあることは否めない事実である。そしてそれは、ひとり学生だけの責任ではない。仲間内で固まり、異質なものとのコミュニケーションを厭う日本の風土と教育の欠如が生んだ結果である。現在、社会の至るところでグローバル・スタンダード（国際基準）が求められているが、それはこうした私たちのコミュニケーション様式にとつても例外ではないのである。

新たなコミュニケーション教育が必要

いま日本は、高文脈社会から低文脈社会へ急速に移行しつつあるといわれる。高文脈社会とは、一々こと

ばに出して言わなくても分かり合える社会である。低文脈社会とは、逆にはつきりモノを言わないと通じない社会をいう。先にのべた、日本語を外向きに発達させる努力というのは、もちろんこのことと大きく重なるのだが、ことはそれほど簡単ではない。自己否定の痛みを伴わざしては達成できない問題だからである。どこから手をつけたらよいのだろうか。さしあたり、新たなコミュニケーション教育が必要だ、と思う。そのためには、国語教育を大きく転換しなければならない。それは単に「話すこと・聞くこと」を重視するというだけではない。中身が問題である。折角「話すこと・聞くこと」の時間を増やしても、従来のように、聞き手意識の希薄な「表現力」というとらえ方では、時代が求めるコミュニケーション能力は育てられない。詳述する余裕はないが（拙著『いま求められるコミュニケーション能力』明治図書を参照されたい）、他者との関係づくりという観点からこそば教育

のカリキュラム全体を組み直す覚悟が必要である。

そのための第一歩は、ことばは、仲良し関係を強化するものではなく、自分とは考えも感じ方も価値観もときには文化さえも異なる他者と関係をとり結び、理解を共有するためにこそあるという認識を根底に据えることである。それには、教室の他者性と多様性が最大限保証されていることが前提である。一人一人が顔が違うように、自分の考え方、自分の感じ方をもつことが奨励されなければならない。教室の価値観が統一され、分かり合った者同士、同じような考える者同士の集団になつてはだめだ。学級が外部に開かれていて、異学年や地域のおじさん、おばさんと交流できることも重要な条件となる。そうした環境を整えた上で、分かり合う困難と通じる喜びを経験させ、ことばに対する信頼感を培うことを教育の中心目標に据えたい。これは、学校教育の変革に通じる大仕事である。

が、もし、今、そのような努力を怠れば、低文脈化し

た社会はいよいよばらばらになり、外国人からの投書は、ここに紹介した程度ではとても済まない内容になつてくるであろう。逆に、今、勇気をもつてことばの開国に踏み出し、日本語を、異質なるものと心を通わせる媒体として鍛え直せば、二一世紀の日本人は、隣りに住む異文化の人々と闊達な議論を通じて問題解決に知恵を出し合うようになつてゐるに違いない。

そのときの日本語を想像するのは大変楽しい。一体どうなつてゐるだろうか。想像力の乏しい筆者に明確なビジョンを描きだすことは難しいが、少なくとも、あいまいで、最後まで言い切らない今の姿とはだいぶ様相が違つたものになつてゐることは確かである。

—— 終 ——

(お茶の水女子大学)

子育ての探究 その三

平安京の親子像

柴崎 正行

平城京の親子像

前回は飛鳥、奈良時代における親子像を見てきた。

それを振り返ると、奈良時代に男女平等に租税を徴収する制度としての律令体制が成立したことにより、その体制を管理する機構として平城京という都市が日本

で初めて構築された。そこではそれまでの農業生産を中心にしていた地域共同体としての家族関係とは全く異なる、生産を伴わない都市型の市場経済社会が形成されていった。そのため財物の私有化が進み、それまでの農村型共同体としての家族意識は急速に崩壊していった。

またこの律令体制は官吏を地方に赴任させて租税を徴収するという制度であったが、地方に派遣された官吏たちの多くは妻子を伴つて赴任したので、核家族とい

う単位での生活を形成するようになった。わたしにとつて、すでにこの時期から親子だけの核家族という形態が存在したことも新鮮な発見であったが、平城京

では年老いた母親たちが残されていて娘親子の帰京を待ちわびているという姿は、現代にも通じる家族像が

すでに奈良時代に成立していたことを示唆していた。

しかしその当時の女性は財産相続権を有しており、たとえ夫や子どもを失つても経済的には独立していたために困窮することはなかった。それどころか女性が経済的な才能を發揮して資産を増やすこともみられたし、夫婦の結び付きもあまり強固なものではなく、まだ夫は妻子を養わなければならぬという秩序も成立してはいなかつたようである（注1）。そのために夫婦の結び付きが破綻すると、子どもは母や母方の家で

育てられることが多く、そのために子どもたちは母親との精神的な結び付きが強かつたが、それも当然といえよう。

こうした律令体制下の親子関係が平安時代になるとどう変化していくのか、都市生活を中心にして続きを読む。

夫婦関係の変化

七九四年に平安京に遷都が行われ、時代は平安時代となり、新たな都市を基盤にした律令制の再建が図られた。その新都の人口については諸説あるが、最近の研究では初期は十二、三万人程度であり、そのうち貴族・官人層が五四〇〇人程度であったといわれている（注2）。このことから、平安京は平城京よりも大きい都市ではあつたが、人口的にはさほど大きな違いはないと思われる。また生活ぶりも政治を司る人々が消費を中心している都市という性格は同じであつた。

しかしそこでの大きな違いは、家族関係とくに夫婦関係が大きく変化したことであつた。

平安京の貴族階層の人々の生活は十二世紀の初めに書かれた『今昔物語』に詳しく描かれているという。

この今昔物語は、九世紀初頭に書かれた『日本靈異記』の説話を社会の変化に対応して書き直したものが多いという。この『今昔物語』をはじめ『源氏物語』、『枕草子』といった多くの書物に描かれた平安京の人々の生活を分析した最近の文献を読んでいくと、次のような変化があつたことがわかる。

八世紀の段階では女性は財産相続権をもつていたので、夫が妻子を養わなければならぬという家族意識はなかつたといえる。また女性も自分で独立して生計を営む力を有していた。しかし今昔物語などに描かれている平安時代の中頃の生活では、一夫一婦制が確立していく夫は妻子を養い家族の生活の糧を確保するため働くようになつてきたことがわかる。そして夫は家長として家族構成員や下人等の隸属者を支配し、家

庭や財産を管理するようになつたといふ。こうした生活の変化の背景には、何があつたのであろうか。

家（イエ）の成立

すでに述べたように平城京では夫婦と親子という核家族が成立したが、夫が財産を管理し家族を支配するという意識はまだなかつた。夫婦といつてもお互いの財産は別々に管理しており、気が合わなくなるといつでも離婚が成立したのである。また離婚は妻からも申し出ることができた。その意味では妻は夫に隸属しているという意識はなかつたのではないか。

しかし平安京の栄えた十世紀になると、朝廷の官職や地方豪族の官職を父から子へと伝えるようになつていった。その官職の世襲制こそが家という意識を強め、官職を家筋で継承していくためにも強固な家族関係を形成することが必要とされるようになつた。私たちが歴史の教科書でよく知つてゐるよう、藤原氏一族による官職の独占状態は、まさにこうした強固な家

族関係により形成されていったのである。

捨て子の出現

このような夫を家長とする家という制度が成立し、身分が世襲されていく平安中期になると、女性たちは独立で身を立てることが次第に困難となり家の妻となることを求めるようになったという。当時の平安京では女性が祈願するときには清水観音にお参りしたというが、そこでの独身女性の祈願と御利益の中味は富と夫であり、夫や子どもたちと家で暮らせる妻の座が憧れの対象となっていたことがわかるという（注3）。

そこで妻（正妻）の仕事は、夫に従属する一方で、夫の補佐をし家司や従者、女房、雑色、下人といった家内構成員たちに対する指揮命令権をもつていた。そして自分が産んだ子が夫の後を継いで官職を世襲し、出世していくことに生きがいをもつようになつたのである。

こうした平安時代を通して家の成立により夫婦関係が大きく変化したが、では親子像はどのように変化していったのであるか。

八世紀末の平城京においては天災や疫病による社会変動があつたにもかかわらず、捨て子はなかつた。ところが九世紀を過ぎると、国家の管符類に捨て子を厳禁するものが増加する。その対策として光明皇后は病者・孤児の収容施設である施薬院や悲田院を設置したほどである。

なぜこのような状況がうまれたのであろうか。平安中期になると経済的自立を果たしている官吏としての女房でさえ、同居する夫を持たなかつたり親の後見がなれば、母子のみでは養育は極めて困難になつていたという（注4）。そのため依存できるような夫や両親を持たない女性の場合には、出産しても官勤めを続けるためには子ども



もを富豪層の誰かに育ててもらうか、捨てるしかなくなったのである。

そのために、捨て子は九世紀に平安京で多くなるのである。村落や親族などの共同体からの援助が乏しい平安京という都市生活では、子どもの養育は父母に任せされることになる。しかし同居する夫がいなくて出産した女性や、夫がいても家計が貧しい家庭、さらには

子どもがいると仕事ができない女性などは、養うことができなくなりついには捨て子をするようになつたのである。

現在の感覚からすると仕事をするために捨て子をするなんて何と愛情のない親かと思うが、当時の社会状況ではそうするしかなかつたのであろう。今昔物語には、父母が生きている時には裕福に生活していたのに、父母が死亡すると没落し自分も困窮して死亡していく女性の説話が多く残されているという（注5）。

こうして都市としての平安京には、捨てられ飢え死にしたり犬に食われて死亡する幼子の姿がみられるよう

になる。そのため富裕層の門前などには何とかその家人に拾われて生き延びてほしいという母の願いを込めて赤子が捨てられたのである。それも女性が自分の力で生き延びていくためには仕方のない状況であつたのであろう。

憧れの職業としての乳母

また平安京における官職の世襲制は、親子関係に別な特色を生みだすことになる。九世紀までは女性自身が自分で朝廷に出仕して任務を果たすことで位をもらうのが普通であったが、十世紀ころから上層貴族層では女性が朝廷に出仕し女房などの仕事をすることが蔑視されるようになつてきたという（注6）。その背景にはすでに述べたように藤原一族の台頭により、世襲制が一般化し生まれた家柄によって社会的・公的に身分が認知されることが多くなつたことがあげられる。

そのために家系を維持することが何よりも大事になり、子どもの誕生と成長が家や財産を存続させるため

の必要条件になつた。そこで家を継ぐ男の子を産むことが妻の条件となつたし、その子を育てる職業として

の乳母の存在が大きな意味を持つてきた。大切に育ててきた親王が天皇になれば乳母は高い位を与えられ経済的な保障もなされた。そのため天皇家や藤原氏の

子どもの乳母になることは、平安京の女性たちの憧れにさえなつたという。

そうした乳母の多くは、受領層など中級貴族の授乳可能な女性たちの中から選ばれたが、選ばれると自分の子どもは実家で受領層よりも下の階層の女性を乳母として住まわせて養育したという。こうして平安京の貴族層では、自分の子どもは乳母に養育させることができ広まつていつたのである。

このように平安京の貴族階層においては、子育ては経済的な基盤を確保するための手段へとその意味が変化していくが、庶民層では、子育ては祖父母や年上の兄姉たちだつたらしい。今回はその点を検討できな

かつたので、次回ふれてみたいと思う。

(東京家政大学)

注

1 森 浩一編 『日本の古代12 女性の力』 中公文庫 一九九六年 三三三九頁

2 木村茂光編 『平安京くらしと風景』 東京堂出版 一九九四年 二二九頁

3 服藤早苗著 『平安朝 女性のライフサイクル』 吉川弘文館 一九九八年 一五三頁

4 森 浩一編 前掲書 一五三頁

5 服藤早苗著 『平安朝の母と子』 中公文庫 一九九一年

一七二頁

6 服藤早苗著 『平安朝の女と男』 中公文庫 一九九五年

二〇四頁

震災後の子どもたち(22)

震災から四年目のあれこれ

上崎 温子

灘区の山手にある、園児も震災前はよく遊びに行っていた丸山公園の復旧工事が完了したのが二月。お彼岸の今日、そこでボランティアの手で鎮魂の桜の植樹が行われたとテレビが報じていました。震災で亡くなつた六千四百人の桜がこれからも公園から都賀川沿いに海岸まで植えられ、レクリエムプロムナードと呼ばれるそうです。

三月三日、所用で長田区三番町に在る保育園をお訪ねしました。全壊した建物は新しくなつていました。家具類は作り付けになつたが、唯一一つテレビが心配、次第に不用心になつてきたと園長先生は仰つていました。当園でもテレビは固定されていないのですが、使い勝手のせいかもしません。ひとしきり震災時の話になり、あの地震が日

中だつたら——と言葉が続きませんでした。帰途、御藏通り、菅原通りを新長田駅まで歩きました。更地のあちこちにプレハブやコンテナハウスが点在し、敷地一面の枯れたセイタカアワダチソウに気が滅入るばかりでした。

震災の年の九月、京都から学生時代の友人が、お見舞が遅くなつてと職場に来てくれました。顔を合わすなり「神戸は未だ地震は現役なのね、喫茶店に入つても廻りは地震の話ばかりだった」と言いました。子ども達は未だ避難生活の状態でしたから、確かに現役です。四年たつた今も、震災後、初めて会う人に限らず、しばしば地震の話が出て、時には胸がつまり、涙がにじむことがあります。或る初老の男性は、まるで条件反射のように——とつぶやきました。

二月二十日、神戸海洋博物館で“阪神・淡路大震災の教訓を世界と二十一世紀に発信する会Ⅳ”があり、今回は小中学生三十六名が“証言”をす

るというので出かけました。シンポジウムの終りに司会者の求めに応じて事務局の方が、小中学生をこの会によんだ経緯を説明したのですが、私は、先日、ご家族を震災でなくした老人から、漸く外に出る気になつたという電話を受けた——と言つたところで言葉が出なくなりました。静まり返つた暫しの後、——こういうことになるので、人前で話したくなかった。平常で話せるのに五、六年はかかると思っていた、というようなことを言わされました。

私は、何か安心しました。淡淡とした日常生活が甦つてゐる被災者も、震災について話をしますと、あの情景の中に——空も空気の色も音も、感情に蓋をした瞬間も含めて——すっぽりと搾めとられてしまうのです。私は、福井大震災にもありました。が、あの頃、父母をはじめ大人達は、どんな思いをしていたのかと、阪神大震災からの生活の中で、度々思つたことでした。住居を失う、職

業を失う、家族を失うこと、そして独り仮設に住むお年寄りのことを一層考えてしまします。多分、私も老いてきて、そのような立場に身を置くことが容易だからでしょう。

地震の起きた日の午前五時四十六分、今年も学園（養護施設信愛学園）では避難訓練を行いました。二つの児童棟、南館には⑤⑥ホーム、復旧した北館には①～④ホームがあり、①ホームは三歳から五歳の幼児、他のホームは幼稚園児から高校生までの男女が共に生活しています。園長の放送を合図に常備された衣服一式と非常食を入れたリュックサック、ヘルメットを身につけ、中高生は①ホームの幼児の手をとり、兄や姉は弟妹と玄関に集合。園長と宿直職員三名が引率し、避難場所となつてある御影北小学校まで歩きます。いつもなら賑やかな集団も、寝静まつてゐる家々を思つてか、喋るものひそひそです。防寒に着ぶく

れした幼児は、懐中電灯のあかりも覚束なく、よく転びそうになるのに、大きな子達は、はつとしてつなぐ手を加減しているのが伝わってきます。避難場所から戻り、震災で亡くなつた方々に黙祷を捧げました。あの日も活躍したドラム缶などに中学生が火を起こし、大鍋をかけ雑炊の準備。幼児の何人かは寒さで泣き出すほど冷えびえた。幼児には何故このような朝食をとるのか、いぶかしげな様子を見せる子もいましたが、小中学生はよく食べていました。後片付けも当番以外も加わり全員で要領よくやつてきました。

子ども達が、震災のことを日々語らなくなつて久しい。あの時間に起こされるのはまだしも、小学校まで行くことはないのにという子どもの声、職員にも、同じような意見や、わざわざ思い出させるようなことをしなくともという思いがないわけではない。しかし、当施設のような居住施設

では夜間に災害が起これば、少数の職員で対応せねばなりません。中高生はそうした時、小さな子達の中心で、重要な働きを任っています。

地震の起きた日も職員のいなかつたホームでは、倒れた箪笥の下から子どもを助け出し、居間の中央に小さな子達を中心にしてかばうように肩を寄せ合っていました。一番に他のホームの子達の安否の確認と、指令を未だ出さない園長は、下敷きになつていていたのではないかと心配して動いたのは中高生でした。日々の生活の中で、こうした事は自然と育っていますが、訓練は備えの一つだと思っています。

一月十七日午前五時四十六分に避難訓練をする何よりも理由は、子ども達に、震災で亡くなつた友達や多くの人々のことを、自然の恐しさを、便利だった生活が一変してしまうことを忘れてほしくないからです。実際、訓練を始めるにあたつては、不満をもらしても、いざ始めると真剣

にとりくんだのは、あの時のことを思い出し緊張があつたからでしょう。

雜炊のお椀に掌を暖めながら、亡くなつた、かつて寝食を共にしたM姉妹のこと、全員無事だったこと、何故、みんな助かったのだろうかと問うている声がしていました。全員で後片付けに協力できたのも、たがいに心情を共有できたからでしょう。彼らの表情は清々しいものでした。

阪神・淡路大震災後、PTSDという言葉が人々の関心をひき、その対応が専門家によつて今も続けられています。瞬時に眼前で肉親を失つた子ども達の心の回復には、何年も何年もの時間が必要なのだと思います。震災半年後の夏、神戸、西宮を中心に兵庫県下の幾つかの児童養護施設の子ども達の、震災による心身の状況を知るための調査がありました。PTSDの同じチェックリストを受けた施設以外の子ども達に比べて、施設で

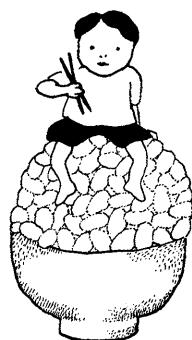
生活する子ども達は少しストレスが強い傾向があつたとききました。夫々の施設で調査を担当した職員に共通した感想は、日頃、子ども達が夫々もつている不安や孤独感などの心の状態が震災によつて増幅したということです。

ご存知のように居住施設に入所してくる時点で子どもは親との別離という深手を負い、その上に新しい環境に適応してゆかねばなりません。家庭の外である社会が家庭となるのですから、馴れ親しんでいくため、どんなにか神経を使い、悲哀を抱えこんでしまうか、たまらない気持にさせられることがあります。生まれたときからの一貫した家族をもつ子どもに比べて、不安が大きかつたり、過敏どうしても無理もないことでしょう。

それらが比較的強く表われた小学二年の悠介君は、避難生活の中で印象的でした。彼は二人の妹と同じホームで生活しており、柔軟でやさしく、幼さが目立つ言動は、周囲を和ませもしますが、

一方劣等感をもたせるような子ども同士の関係も生じやすいところがあります。両親は、週末などに子ども達を迎えて、一泊二泊の帰省は多い方でした。

震災後二週間ばかりたった避難生活のところへ両親が迎えに来られました。彼は風邪で熱も高かつたので、赤ちゃんもいる家庭に帰ることができず、妹二人は帰りました。それからの彼は、保母につきまとい、保母の姿が見えないと幼児のように泣きパジャマのまま捜しまわっていました。彼は両親から置き去りにされたと思つたのでしょうか。普通の生活でならそうでもなかつたのでしょ



うが、余震がありましたし、ホームではなく、大きな集団での避難生活は、気の弱い悠介君には難で、不安な毎日だったのです。

私にも同じような経験があります。空襲のあと疎開先の村の分教場に転校することになり、母が手続きをすませ学校を出ました。私は、たった一つの教室の窓から身をのり出し、谷川に沿って下りていく母の姿に向かって泣き叫んだのでした。幼稚園も入学した小学校も校区外生で、ひとりには馴れていた筈でしたのに。私は自尊心を傷つけられたようで恥ずかしさがあり思い出さないようにして来ましたが、学園の子どもは私にそのことをちらちらと思い出させました。

阪神大震災は、より鮮明に、生命を左右した災害にあつた子ども達の不安を教えてくれました。

悠介君も私も置き去りにされることの恐怖が根底にあつたと思います。彼は今、小学五年生、随分おとなびて来ました。地震速報の信号を耳にする

と、テレビを振り返り、日本地図で場所を確かめています。

貞子ちゃんは小学四年生でした。〇歳のとき、お姉さんと一緒に入所しました。彼女は御飯をなかなか食べず、たまたま私がやりますと、よく食べたのです。それ以来、乳児院に行きますと、彼女は急いで這つて来て私の膝の上にのりました。相性がよかつたのでしょうか。一歳過ぎ家庭復帰したのですが、再び入所、私のことはすっかり忘れていました。父親宅への帰省、外出も多く、父親と姉妹でローランサン展を見に行つたこともあります。

父親のアパートは全壊し、帰省できなくなりました。北館の取り壊された更地の片隅で、背を丸めてひとり砂遊びする姿をよく見かけました。夏休みも帰省できませんでした。彼女はひとりぼつちになつたような気がし、地震をとてもこわがっていました。父親が仮設住宅に入れて、面会に来

られるようになつて、漸く明るさを取り戻しました。

静かでおとなしい彼女は去年の秋、兵庫県の中学生全員が社会参加したトライアル・ウイークで保育所を選びました。毎日、子どもたちと遊んで帰園すると、ぐつたりしていましたが、彼女らしい選択だつたと思います。

子どもは博愛だけでは育たず、度々会えなくても親が心の中心にあり、親に会えない子どもは、今、季節里親さんがしつかり支えてくれています。施設で働く者は、無力感をもつことがあります、子どもが悲しいとき、つらいときに、より添い、幸せであるための黒子であつてよいのだと思います。

昨日、神戸市内の仮設住宅のあちこちでお別れ会がありました。仮設住宅はこの三月いっぱいで解消されるそうです。神戸にあつても震災への思

いは様々です。他の地では四年前の事は過去のこと、災害というのはそうしたものだと思います。しかし神戸では震災はそうであつてはいけないと思っています。「児童の教育」が今も眼にとめて下さっていることに、温かさを感じると同時に、私は緊張もしています。(児童名は仮名)

(社会福祉法人信愛学園)

生活者としての子どもたち

伊集院理子

二年間担任してきた子どもたちを、この三月に卒園させた。この二年間、私は、子どもたちと共に生活を作っていく、ということを意識して過ごしてきた。

登園するとすぐにそれやりたいことを見つけ、個々に、または仲間と多様な活動を開いていく自由な遊び中心の生活の流れの中にも、片付け、お弁当、帰りの集まりなど、節目になる時があり、そういう時は、全

体の流れに沿う行動が子どもたちに求められる。また、数はかなり限られているが、時には、園外に出かけて行ったり、園内でも行事のためや、こちらがこういう事も体験してほしいと思って意識的にいつもと異なる生活の流れを促す事がある。そういう場合も、日常とは異なるその日の流れを作り出し、それに沿う行動が求められる。

私は、自分のやりたい遊びをやりたいようにする日常の生活の流れはもちろんのこと、いつもとは違う日の流れにも、子どもたちが主体的に関わるよう、子どもたちが見通しを持って生活を作り出していけるようにと考へて、子どもたちに関わってきた。直前になつて事細かく指示するのではなく、この後どういう事が展開していくのか、子どもたちが自分の中でイメージを持つて生활していけるように、子どもたち自身が生活の流れを作り出しているという意識が持てるように、全体の大まかな流れをあらかじめ伝え、その先はできるだけ子どもたちに任せるようにしてきた。先手を打つて、後は相手の出方に合わせていく感じだろうか。これまで、タイミングよく先手を打つことができず、直前になつて色々指示する形になりがちで、心の準備ができていない子どもたちは、当然、こちらの言うことにすぐ従つてはくれず、とはいって、時間は押していく、どうにかして流れを作つていかなくてはならない状況は切羽詰まつていて、保育者が一人きりきり空回りして強引に流れを作つ

てしまつことが間々あつた。そうなると、訳も分からず保育者の指示通りに動く、突然言われてもそんな事には従えないと自分たちのやりたいことをやり続けるか、どちらにしても、子どもたちが見通しを持って意識的に生活の流れを作り出すという部分が欠落してしまうことになる。自分のやりたいことを見つけそれを実現していく生活にも、全体の生活の流れや保育者の意図する事柄に取り組む生活にも、とともに、主体的に子どもたちが関わっていくようにしなければ、眞の意味で、幼稚園生活の主体者として子どもたちを位置づけていることにはならないのではないか。そのためにも、全体の流れを作る時、こちらが意図する流れを作る時、子どもたち自身がその子ども自らの判断でその流れに沿う行動がとれるようになると考へて、子どもたちと関わってきた。その積み重ねの成果とも言えると思うが、卒園させた子どもたちの手応えとして、私の中に残つてゐる一番の印象は、生活の流れがとても作りやすい子どもたちだったということがある。

そういう子どもたちではあつたが、中には、安定した自分なりの生活をなかなか作り出せない子ども、全体の流れにはお構いなしに行動する子どももいた。そういう子どもたちは、現われ方は様々であるが、幼稚園の生活にその子なりの確かな根っこを降ろせないで浮遊しがちな子どもと捉えることができる。そういう浮遊しがちな子どもを、幼稚園生活の中にしつかりと位置づけていくにはどうすればいいのか、そのことについて、まだ自分の中でもあまり整理できていないまま、私なりに考えてきた視点をあげていこうと思う。

仲間のなかに居続けること

「Aの場合」

Aは、遊びの中で友達と行き違いがあると、相手にして声を荒げ威圧的に出てしまいがちなところがあつた。そういうこともあり、Aは友達から仲間に入れてもられないことがあり、その事をとても気にしていた。一緒に遊びたいと思っているグループの様子を少し離れて

見ていることがよくあつた。そのグループの子どもたちはAの事をいつも排除しているわけではない様子なのに、「入れてくれない」と担任に訴えてくる事があつた。担任が間を取り持つて、折角遊びに加わっても、そこに居続ける事ができずに、ふらつと抜けてきてしまう事が多かった。そのグループとの関わりだけでなく、誰かと仲良く遊んでいたかと思うと、次に見た時はその場から離れてしまっているのである。

五歳になつてからは、大分仲間の中に入れるようになつていった。大人数での集団遊びにもすつと加わってきて遊び始めるのだが、これといったトラブルがあつたわけでもないのに、少しすると「やめる」と言って抜けていってしまう事があつた。遊びに加わっても、遊びの中に居続ける事がなかなかできないのだ。友だちとのやりとりでも、些細な事で自分が非難されたと思いつみ、相手に対して大きな声で暴言を吐くところは少しずつ減ってきてはいたが、相変わらずだった。暴言を吐きながら、その場に留まることができず、身体は少し

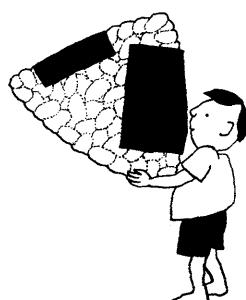
ずつ少しずつ後ずさりしていたり、暴言を吐き捨てて走り去っていったりした。遊びの中に居続ける事ができなかつたり、暴言を吐いたり、仲間に對して威圧的に出たりするのは、Aのありのままの自分に對する自信の無さから来ているように思え、担任としては、遊びの中にAが居続けられるよう、友達との関係のなかで強がらずにありのままの自分を出せるように、励まし支えてきた。

五歳の後半になると、仲間の中に大分位置づくようになつていったが、ふらつと抜けてきてしまうところがまだり、Aのそういうところは、Aの幼稚園での生活の中での存在基盤を確立しにくくしていると共に、仲間にとつてもAのことを仲間と思いにくくしていた。

～Bの場合～

Bも、ありのままの自分に自信が持てない感じで、何となくいつもおどおどしているようなところがあつた。友達が作つていてるものに刺激を受けて、心を動かして自分なりに始めるのだが、こそぞとおざなりに慌てて作つている感じだつた。作つたものに對して、誰かに何

かを言わると、
Bの作品を否定するような内容では
ないのに、注目されただけで、折角
作ったものをぐちやぐちやにして



しまつたりした。他の友達がしている事にはとても興味があり、面白そうだと自分から関わつていつた。一緒に楽しむのだが、突然べたべたしつこく友達にまとわりつくようなことをしたり、友達との些細なやりとりに一人よがりに傷ついて、目に一杯涙を溜めて黙つたままその場を離れて、自分の中に引きこもつてしまつことがあつた。突然べたべたしてきたり、突然場を離れていくてしまふBは、一緒に活動している子どもたちのなかに、いつも一緒に遊ぶ仲間としては位置づきにくいようであつた。年中の二学期、Bは虫取りに夢中になり、Cといっしょに虫取りをするようになつた。Cはとても穏やかな

性格で、自分を強く主張するのではなく、Bのベースに合わせながらBと行動と共にし、多少しつこい事をされても、そんなBをもCは受け入れてくれた。行動と共にしてくれるCがいたからこそ、「どんな自分も受け入れてくれるCがいたからこそ、Bは日がな一日安定して自分のやりたい遊びに集中できるようになつていった。二学期中旬以降から、D、E、Fというメンバーが加わり、五人グループで行動するようになつていった。Cのみでなく、他の三人のメンバーにも受け入れられて行動共にできるようになつていった事が、Bの自分に対する自信につながつていった。それからのBは、グループの友だちとのやりとりの中で食い違いがあつても、その事で必要以上に傷ついたり、自分の方から友達とのやりとりから引きこもつてしまふ事がなくなつて、グループのメンバーの中に居続けられるようになつていった。複数の仲間に受け入れられているという事が、園生活の中でのBの確かな基盤になつて、仲間と共に自分たちのやりたい遊びをしていく、園での生活を安定して組み立ててい

けるようにBは変わつていった。

仲間とは離れて自分のやりたい事を追求できる事

五歳児になつて、子どもたち、特に男児は仲間と群れを成して行動する事が多くなつていった。一緒に活動する楽しさを十分味わいながら、リレー、泥警等の集団遊びを自分たちだけで展開していくようになつていった。大人数で盛り上がりながら、リレー、泥警等の集団遊びが、その遊びが一段落した時、次の遊びが見つかるまでの間、集団で浮遊する時間が長くなつていった。仲間と一緒に世界を共有する楽しさを求めるあまり、それぞれのやりたい事を追求していく生活が組み立てにくくなつてゐるようと思えた。そんな子どもたちに対して、遊びが停滞している時には、「みんなでやる事ではなく、一人一人やりたい事を考えてみよう」というような働きかけをしてきた。そうすると、少し別々に行動するのだが、また少しするとすぐ行動を共にしたがつてしまうのである。仲間と過ごす楽しさ、仲間の中に身を置いておく快適さ、

樂さを味わつてきた子どもたちは、仲間集団に背を向けて、自分の世界を一人で追求する事に向かいにくくなつていた。仲間との生活だけではなく、時には自分一人の生活も、自分の思いのままに組み立てていけるようではなくては、生活の主体者とは言えないのではないか。仲間と一緒に世界と、自分一人の世界を自由に行ったりきたりできるような生活を、それぞれがつくりあげていけるようにしていかなくてはならないのだろう。

行動を完結していく事

Gは、個性的というか、マイペースというか、周りで展開している事には我関せずという感じで、常に自分を中心の世界に生きていて、全体の生活の流れにとても乗りにくい子どもであつた。発想がユニークで色々な事に心を動かし取り組むのだが、興味が移ろいやすく、今ここにいたと思つたら、次の瞬間に別のところに移動し、違う事を始めているという感じに刹那的に行動する事が多かつた。担任としてはGの行動ができるだけ細かく把握

握しようと努めていたが、どうしても担任の視野から抜け落ちてしまいがちであつた。片づけの時などは、ぎりぎりまで自分のしたいことをやり続け、みんなが片付けが終わつた頃、ちゃっかり帰つてくるような子どもでもあつた。友達関係においても、自分中心のところがあり、被害者意識が強く、ちょっとした事で泣いてさわぐことがあつた。その時の状況を客観的に把握しようとするのではなく、一方的に「いじめられた」とか、「たたかれた」などと言つて泣いて大騒ぎするのである。そういう場合、担任は、Gをひざに乗せたり、Gの傍らに寄り添いながら、Gの言い分をまずよく聞いて、Gの気持ちを落ち着かせ、それから、できるだけ客観的な事態の把握をGができるように、相手の立場、相手の気持ちにも気づけるように促してきた。Gは、担任に受け止めてもらうと、泣き止んで落ち着きを取り戻して、自分から立ち直つていつた。気持ちの切り替え、立ち直りは早い方で、「さつき鳴いてたからすがもう笑つた」という感じに、今展開していた事がなかつたかのように、全く違

う事を始めたりすることがあった。担任としては、Gに寄り添いながら、少しづつ周りの状況にも気づいていつて欲しいと思って一生懸命伝えていた事が、Gには響いていかないうちに、次の展開に流れていってしまう感じがした。担任としては、Gの個性的なところ、ユニークな感性、発想などを大事に育てていきたいという思い、

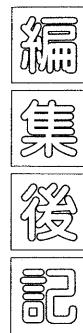
頭ごなしに型にはめるような事はしたくないという想いがあり、ありのままのGに寄り添う事を第一に心がけてきた。しかし、ある時、その時々のGの興味、Gの自分中心の論理に流されていて、Gの行動が一つのまとまりのあるものとして完結していっていい事に問題があるよう思えた。Gの場合は、寄り添う事ばかりではダメで、向き合って一つ一つの事を一緒に完結させていかなければならぬという思いに至った。そういう思いに至つたのが、年長の半ばで、志半ばにして、Gを卒園させる事になってしまった。

Gは色々な事をしているのに、幼稚園で確かな生活を送っているという感じが、周りから見ても、G自身にお

いても成立しにくかったのではないだろうか。自分の論理だけではなく、人の論理、集団の論理に向き合つて、一つ一つの行動をまとまりのあるものとして完結させていく事を生活の中で積み重ねていく事が、真の生活者になりえるためには大事なのだと思う。

まとまりのない事をいろいろ書いてきたが、子どもたちを確かな生活者として位置づけるためには、相対するようと思える事を共に達成していくことがポイントなものかもしれない。全体の流れに沿う生活と自分のやりたい事を追求する生活、仲間との生活を充実させる事と一人でも自分の生活を自分で組み立てていけるようになる事、子どもに寄り添う事と向き合う事、など、どちらか一方ではなく、双方を柔軟にバランスよく展開していく事が大事なのではないか。

これからも生活者としての子どもたちと、生活を共に作り出していく事をさらに考え続けていきたい。



ます。その一声は十分に大人を楽し
ませてくれます。新米お母さんの私

はその声をもう一度聞きたくてつい
ついまた同じようにお尻を持ち上げ
ます。すると、また、「えへへ」。気

がついてみると、二人で何度も同じ
ことを繰り返しているのです。

この「思わずかわってしまう」
ということが子育てのなかにはたく
さんありました。二人でかかわりあ
めで考えてみるよい機会になりまし
た。

*

私はコミュニケーションというこ
とを子どもから教わった気がしてい
ます。
例えば、赤ん坊を腹ばいにしたと
き、たまたまお尻を持ち上げたら、
一声「えへへ」なんて心地よさそう
な笑い声が漏れたりすることがあり

幼児の教育

第九十八巻 第八号

(一九九九年八月号)

定価五五〇円(本体五四円)

発行 平成十一年八月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二丁目

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-820 東京都港区三田五丁目一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-861 東京都文京区本駒込

六一一四一九

☎ 03-3153-9516-613 (営業)

☎ 03-3153-9516-604 (編集)

振替 00-190-111-19640

☆ 本誌ご購読のご注文は発売所フレー
ベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

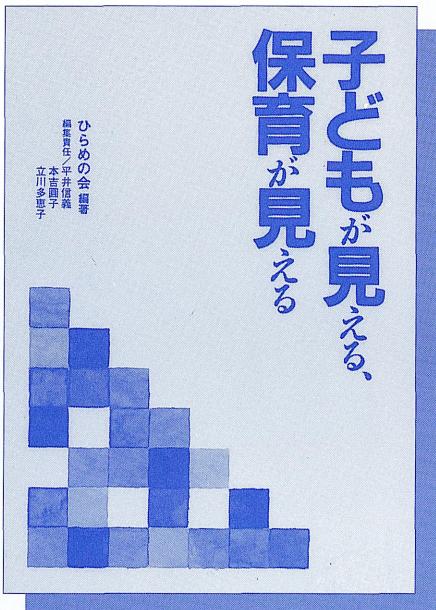
子どもが見える、保育が見える

ひらめの会 編著

編集責任／平井信義・本吉圓子・立川多恵子

好評
発売中

保育に花を咲かせましょう



◆好評既刊本！

心踊らせて保育の現場に飛び込んだものの、保育しにくい子どもに困ったなど感じたり、同僚・先輩と保育の意見がかみ合わず人知れず悩んだり、保護者との対応に戸惑うといった経験をされてはいませんか。

本書はそんな悩みをお持ちの保育者に、さまざまな角度から問題解決の糸口を示してくれる格好の保育入門書です。

明日の保育を実りあるものにしたいと努力されている方々にお勧めします。

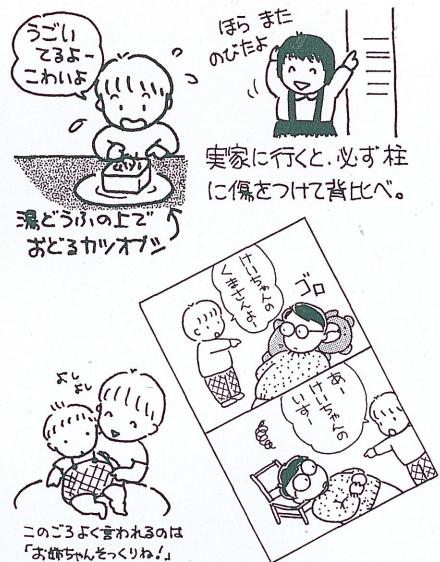
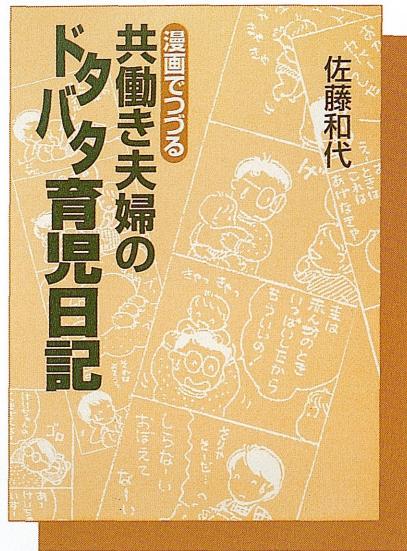
A5判 288頁 定価：本体2,200円+税

キンダーブックの
フレーベル館

漫画でつづる

好評
発売中

共働き夫婦の ドタバタ育児日記



個人的な育児にまつわるできごとが、子育て奮闘中のお母さん方の笑いと共感をよぶのびのび育児日記。

保育者にも、育児中の母親がどんなことに喜び、不安を感じるのかがわかり、母親対応のコツがつかめる本として活用できます。

佐藤和代 著

B6変型判 208頁 定価：本体1,200円+税

キンダーブックの
フレーベル館